

丹後・大風呂南1号墓のガラス釧と台湾

石野 博信

2002年3月23日、台湾・台東市の国立台湾史前文化博物館を訪ねた。当初の目的は、台東市の沖合いにある蘭嶼島の地平下の大凹地に建つ伝統的民家を見るための一人旅であった。

島へ出発する前に博物館を訪ねて驚いた。建物や展示施設の立派さもさることながら、かねてから宋文薫氏が積極的に調査・研究されている台湾・卑南文化の出土品が勢揃いしている。卑南遺跡の箱形石棺墓から出土した頸飾・耳環・腕輪などの玉製品をはじめ、石槍・石鏃・石斧などがずらりと並ぶ(宋・連1989)。その一画の著名な「人獣形玉玦」は目立つ。

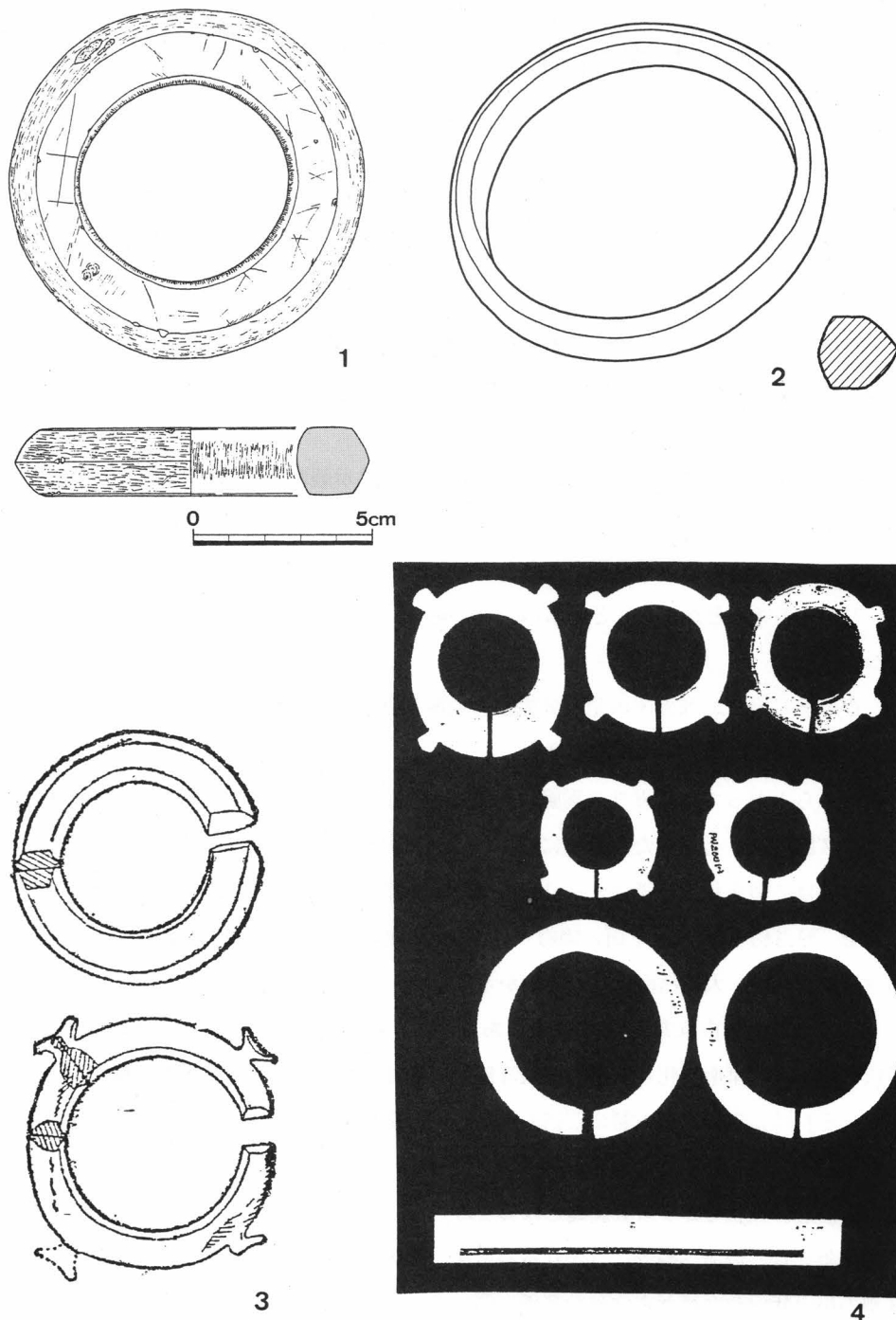
一つの展示室に北部九州の須玖式甕棺の口縁端部とよく似たつくりの高さ70cm余の大甕があり、近くには大甕の単棺が横たわっていた。

壁にぶら下がっているガラス製腕輪が眼に入って立ち止まった(第1図2)。「大風呂南のガラス腕輪だ」と感じた。題箋には、「十三行遺址、玻璃手環、鉄器時代」とある。ガラス腕輪は2個あり、外径は8~11cm。直ちに大風呂南を連想したのは、その断面形だ。五角形、厚さ約1cm、上下面に幅約4mmの平坦面があり、外側を三角錐状につくる。色調は薄青色だが、大風呂南ほどの鮮やかさはない。

1929年から台東市東方33kmの海上にあるリユー島(緑島・旧火燒島)を調査した鹿野忠雄氏によると、卑南文化と同類の玉玦耳飾りや垂飾、管玉とともに軟玉製腕輪が出土している。それはまるで、碧玉製の石釧や車輪石の円孔を穿削するのと同じような方法で穿孔したらしく、同孔と同じ大きさの円板が共伴している(第1図3、鹿野1946)。リユー島腕輪の断面形は板状でガラス製腕輪とは異なる。

2005年9月、台湾へ調査に行かれる角南総一郎氏(元興寺文化財研究所)に「台湾のガラス釧の出土状況や台湾考古学界の評価を聞いていただければ」と依頼した。角南氏は同博物館の林志興先生のご配慮によって実物を観察された上、多くのご教示を受けてこられた。それによると、台湾ガラス釧に関する研究状況は以下のとおりである。

1. 台湾のガラス釧は蘭嶼島の椰油遺跡と十三行遺跡の2か所で知られているだけであ



第1図 大風呂南1号墓と台湾のガラス釦
 1：大風呂南1号墓、 2：十三行遺跡、 3：火烧島、 4：卑南遺跡

る(Imurud遺跡については、ド・ボークレール(BEAUCLAIR1972)によって報告されている)。

2. 椰油遺跡では、11-12世紀の白磁と共伴しているらしい(角南1999)。

3. ルーツについては、中国南部から東南アジアのサーフィン文化やドンソン文化の関連説もあるが不明。

大風呂南1号墓は弥生後期後葉で、北部九州系の有鉤銅釧とともに南海産のゴホウラ製貝輪が出土している(岩滝町教育委員会2000)。その上、埋葬施設は舟底状木棺で、後続する赤坂今井方形墓の舟底状木棺とともに丹後弥生「王」墓の海洋交易民的性格を思わせる。

沖縄の古座間貝塚などには北部九州弥生人用と考えられているゴホウラ貝集積遺構があり、丹後弥生人の南島文化との接近が推定できる。

朝鮮半島や中国本土の同型のガラス釧出土例が明らかでない現状で、大風呂南1号墓ガラス釧のルーツを求めることは難しいが、興味ある類例として台湾の2例を紹介させて頂いた。

台湾ガラス釧との偶然の出会いに肉付けして頂いた林志興先生と角南総一郎氏に感謝いたします。

(いしの・ひろのぶ=当センター理事、二上山博物館館長)

参考文献

- | | |
|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 岩滝町教育委員会 | 2000『大風呂南墳墓群』岩滝町教育委員会 |
| 鹿野忠雄 | 1946「火焼島に於ける先史学的予察」『東南亜細亞民族学先史学研究』所収 矢島書房 |
| 角南総一郎 | 1999「台湾の土器棺葬-研究史と資料集成」『元興寺文化財研究』71 |
| 宋文薫・連照美 | 1989『卑南遺址第11-13次発掘工作報告』国立台湾大学文学院人類学系 |
| BEAUCLAIR, Inez de | 1972 "Jar Burials on Botel Tobago Island" <i>ASIAN PERSPECTIVES</i> , 15-2, Far Eastern Prehistory Association |

